

橋本ひだまり倶楽部（清水小学校） 森林環境教育（森林E S D）プログラム分析シート

プログラム名： 子ども力（こどもりよく） 学生だって竹林整備!!		
(1) プログラムの目標	① 市内にある森林に足を運び、身近に存在する自然の豊かさを知る。 ② 森林体験により、四季を感じ、自然の面白さや変化を感じる。 ③ 和歌山県の木材を利用し、森を活かし（木工・ホダギ作り）を実践する。 ④ 森林整備を行うことで、道具の使い方や身近な危険を知る。 ⑤ 森の中に流れるゆったりした時間の流れ感じ、再度、森に来たいと感じる。 ⑥ 森林に関わる地域の人達によって、愛される森林づくりをしていることを知る。	
(2) プログラムの概要	① 和歌山県内の小学1年から6年生を対象に、補助金を利用して体験活動を行う。 ② 団体が持つプログラム内容を提示し、学校と協議の上、森林体験の内容を決める。 ③ 活動プログラムの日程・時間配分・持ち物を明確にし学校と摺合せを行う。 ④ 事前学習・事後学習、事後体験活動の いずれかの内容をプラスして決める。 ⑤ 活動に伴う危険と危険回避の方法について学ぶ。 ⑥ 自力または協同作業で、木工やホダギ作りを行う。 ⑦ 森林の散策を行い、季節によって自然環境が変わることを目の当たりにする。 ⑧ 竹林整備・樹木伐採、階段造り、薪拾いを行う。 ⑨ 森林体験活動の感想を文字にして振り返る。	
(3) プログラムの展開		
活動内容について、プログラムの流れで、記載する。 合わせて、段階的な学びとして、3つのタイプのアクティブ・ラーニング（in、about、for）の視点で活動内容を区分してみる。 ・ in（～の中で）－ 体験、観察、製作など（関心・意欲、知識・技能） ・ about（～について）－ 情報収集・分析、情報交換、討論など（知識・技能、思考・判断・表現） ・ for（～のために）－ 提案、実践など（態度、参加・行動）		
時間数	プログラムタイトル	
	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）	
in、about、for の視点で活動内容を区分		
7 時間	10月 和歌山県の木材を利用して木工作品を完成させよう！	
	①活動全般の注意を話す ②小刀を使った鉛筆削りを行う ③木工に必要な道具の使い方を学ぶ ④講師より木工作品の製作手順の説明 ⑤木工作品製作	①季節や天候によって、森の危険性を知る。 ②小刀で危険な道具の基本の使い方を習得する。 ③道具は、専門職から正しい使い方を学ぶ。 ④製作の流れを説明し、ポイントを押さえる。 ⑤学年以上の忍耐力と集中力が発揮できる。
3 時間	in	
	10月	
3 時間	①雨天以外、全ての活動を屋外で行う。 ②屋外は鳥のさえずり、木々を揺らす風音を感じ、ゆったりした気分で過ごす。 ③休憩時間は、森で自由に遊ぶ。 ④木工製作の合間の息抜きにの冒険タイム ⑤森で食べる昼食は景色がご馳走！	①自然の中で過ごす爽快感を味わう。 ②森の心地良さや、学校の教室内での事業との差別化・児童の最小限のストレスを考慮。 ③森の中では各々が自覚を持って行動する責任感を持つ ④遊びを見つけ出していく積極性を養う。 ⑤屋外での食事の美味しさの根源を知る。
	about	
2時間	12月 小学生だって竹林整備!!（事後体験活動）	
	①雨天決行でも行う。 ②2人1組のペアを作る。 ③斜面でノコギリを使って竹林伐採を行う ④倒した竹の枝払いを行う ⑤適当な大きさに切り運ぶ。	①合羽・長靴の準備を事前に案内し、雨天に備える。 ②共同作業は、互いの協力が必要であることの認識 ③竹林伐採は、声掛けや足場に注意を払う。 ④枝払いを行い、片付け作業まで行う。 ⑤自分達が伐採したこと達成感・満足感を得る。
2時間	in	
	12月 森林散策・感想文	
2時間	①森の中をゆっくり散策。 ②10月の森の自然との違いを実感する。 ③フユイチゴ食べ放題 ④森の土と校庭の土の違いを学ぶ。 ⑤感想文を書いて森林体験を振り返る。	①自らが五感を感じ習得していく。 ②季節によっての森の自然の変化を発見する。 ③根から採らないこと・自然の恵みに感謝する。 ④落葉で作られている腐葉土について知識を得る。 ⑤感想文にまとめることで改めて森林体験を再認識する
	for	

(4) プログラムでの連携内容

(教育機関、地域、団体等での、①連携・協働先、②役割分担、③具体的な連携・協働の内容)

①連携・協働先

和歌山県伊都振興局林務課 教育委員会 橋本市内小学校 橋本ひだまり倶楽部

* * * * *

②役割分担 ③具体的な連携・協働の内容(プラン1)

- (ア) 和歌山県伊都振興局林務課から教育委員会に、次年度紀の国緑育推進事業を案内
- (イ) 教育委員会→各小学校へ紀の国緑育事業の募集を案内
- (ウ) 各小学校より、教育委員会へ緑育事業参加希望を連絡
- (エ) 教育委員会から連絡のあった小学校・橋本ひだまり倶楽部間で事業内容について打合せ
- (オ) 橋本ひだまり倶楽部から、教育委員会へ見積書提出
- (カ) 内容について、和歌山県伊都振興局・教育委員会・橋本ひだまり倶楽部で三者打合せをする場合あり
- (キ) 採択後、小学校・橋本ひだまり倶楽部で、実施日の詳細を打合せ
- (ク) 橋本ひだまり倶楽部会員と緑育事業内容・実施日について打合せを行う
- (ケ) 緑育事業実施日は、和歌山県伊都振興局の抜き打ち見学がある。
- (コ) 事業終了後、橋本ひだまり倶楽部から教育委員会へ、事業報告書・請求書提出

* * * * *

②小学校が独自で補助金申請し、教育委員会を通さずに森林体験事業を行う(プラン2)

- (ア) 小学校が、森林体験補助金(緑の募金事業)を独自に選択
- (イ) 小学校より、橋本ひだまり倶楽部に事業内容・見積書作成依頼
- (ウ) 小学校は、市農林振興課へ補助金申請書を提出。
- (エ) 市農林振興課→和歌山県伊都振興局林務課へ、補助金申請書提出。
- (オ) 採択後、小学校と橋本ひだまり倶楽部で事業内容等打合せ。
- (カ) 橋本ひだまり倶楽部会員と事業内容・実施日について打合せを行う
- (キ) 事業終了後、橋本ひだまり倶楽部から小学校へ請求書提出
- (ク) 小学校は、補助金の事業報告書を市農林振興課へ提出。

1年 生活：身近な自然の観察、利用

2年 生活：生き物を育てる、成長

3年 社会：飲料水、地域の生活 理科：昆虫と植物(自然の観察、植物を育てる)

4年 社会：都道府県の様子・生活 理科：季節と生物(身近な植物の成長、季節による違い)

5年 社会：国土の自然・環境、国土保全 理科：植物の発芽、成長、結実

6年 社会：歴史上の事象、文化財 理科：生物と環境

総合的な学習 横断的・総合的な課題の学習、社会体験、討論・発表

特別学習 遠足・鑑賞、集団活動・生活

森林環境教育の視点

1 感性的経験 感性的な内容 — 森林の感性的把握や美的把握、畏敬の念など

2 自然的特性 森林の自然的特性に関わる内容 — 植物や動物の生態など

3 多面的機能 森林と人とのかかわりに関する内容 — 森林の働き、保安林など

4 現状・課題 森林の現状に関する内容 — 森林の荒廃、人手不足など

5 管理・維持 森林の管理・維持に関する内容 — 森林整備、育成、維持、管理など

6 歴史・文化 森林とのかかわり方の歴史 — その土地での歴史、薪炭林、炭焼き

(5) 活動の分析(学習指導要領との関連または森林環境教育の視点) 上位3項目

教科・項目、視点	学習内容
1 生活・理科 自然的特性	1年生から4年生までに習う理科の中で、生き物・昆虫・植物の観察や知識を学ぶ上で、実際に森林に足を運ぶことが必要。日常生活の中で、森林や昆虫、植物などに接することが少ない児童にとって、森林は、感性を磨く生きた教科書である。
2 生活・理科・社会 感性的特性	感性は、教科書を勉強しただけでは得られないものである。自然に触れることも学習の一環として導入していただきたい。体験することで、目の当たりに、感性を研ぎ澄ますことが出来る。学習指導要綱の内容に照らし併せた学習と、森林体験が今後の重要な課題である。
3 社会・理科 管理・維持	森林問題を社会の課題として捉えていない日本の現状については、生徒だけでなく、大人も含め、日本全体の現在の問題である。幼い頃より森林に親しみ、見て触れて感じる経験など、森林環境についての意識が少ないことを感じる。知識の習得に励むことが優先される学習の中に、森林の現状・維持・管理について学びたい。

(6) 活動の分析 (資質・能力の視点)				
E S Dの要素 (生きる力)	能力	1 批判的に考える力	態度	5 他者と協力する態度
		2 未来像を予測して計画をたてる力		6 つなぐを尊重する態度
		3 多面的、総合的に考える力		7 進んで参加する態度
		4 コミュニケーションを行う力		
資質・能力 三つの柱	①生きて働く「知識・技能」の習得			
	②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成			
	③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養			
次期学習指導要領では、持続可能な開発のための教育 (E S D) 等の考え方も踏まえつつ、「生きる力」とは何かを、「資質・能力」(三つの柱)に沿って具体化するとしています。 活動を、三つの柱の項目に再整理して記載をしてください。(該当がない項目は空欄)				
項目	E S Dの要素(7つの能力・態度)の視点で見つめ直して、 もっとも重視する視点の内容を記載してください。			
①生きて働く「知識・技能」の習得	① 年間に数回の森林体験を通じて、小学生に生きる力を具体化するとは難しい課題です。森林体験や活動をしたから、すぐに成果や結果を求めるのではなく、長い年数を掛け、活動を継続していくことが大切ではないでしょうか。 ② 道具の基本的な使い方、危険回避については、クセがつく前に正しい基本の使い方を教えるのが適切です。			
②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成	① E S Dとは「持続可能な開発の為の教育」の意味が一般には理解しにくい言葉です。未知の状況にも対応できる3つの「○○力」の育成は、単発・短時間学習では決して養われるものでないと思います。長期継続して森林E S Dを行う意思があるかどうか、教育機関の問題かと思っています。教育委員会や学校等の教育機関が、如何に児童の為に、長期に亘り、取り組む姿勢があるかどうかことが重要課題ではないでしょうか。			
③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養	① 森林体験をした結果、心に残ったことや「再度来たい!」というきっかけを活かしてあげることができたら、学びにつながっていく通過点の役割は多少担えます。しかし、学びを社会や人生に活かす人間性の涵養には、やはり森林体験だけでなく、どんなことでも継続をて行かなければ、一過性のものに終わってしまいます。森林E S Dで、児童の人生や社会に結び付けること＝継続した教育指導が必要かと思っています。			
(7) 実施後、参加者の変化				
① 身近な場所に安全な森林の存在を知ることが出来た ② 季節によって森林の自然環境が変化することを体験できた ③ 森の樹木や木の実、薪を使って煮炊きや暖をとる、灰の活用等、の循環を学べる ④ 森に来ることで元気になり、緊張感も生まれ、挑戦心や協調性が今まで以上に養われる ⑤ 森林体験をすることが「楽しい、また来たい!」になり、次の新たな実践に繋がっていく				
(8) 安全対策として事前・当日の取組事項				
① 森林体験実施日前にはスタッフで森林の安全点検を行っている ② 学校との打合せで、森林体験をする為の服装・持ち物を案内 ③ 雨天決行を原則とし、長靴・合羽・タオル・着替え等案内 ④ プログラム実施日に、児童に森林に潜む危険を説明する ⑤ 初めて使う道具の正しい扱い、また危険な使い方を説明する				
(9) プログラムの今後のめざす方向・展開				
① 学校では体験できない屋外での森林プログラムは、居心地の良い児童に人気の時間である ② 身体で感じ、森林での爽快感や、体験したこと「楽しかった!」を残したい。 ③ 「楽しかった」のみで終わるのでなく、事前学習・事後学習を通じ、森林体験したことを活かす ④ 森林環境にまで踏み入れ、学校全体で取組めるような学習の展開を行って行きたい				
① E S Dという単語自体、抽象的でわかり難い言葉である。「持続可能な・・・?」特に分り難い ② 児童の将来を見据え、感心を持って取り組んでいる教育委員会や学校各々の考えが一貫していない ③ 森林体験に来たら、ゆったりした時間を過ごして欲しい ④ 森林体験をもっと低年齢化した実践をして欲しい ⑤ 市も学校も団体も余裕資金がなく、対象になる補助金制度を整えて欲しい				